

# 日本ジュニア室内陸上大阪大会 (2/2・3 大阪城ホール) RESULTS

<中学女子の部>

60m 西尾 香穂 7秒86 山本 祐莉 8秒12

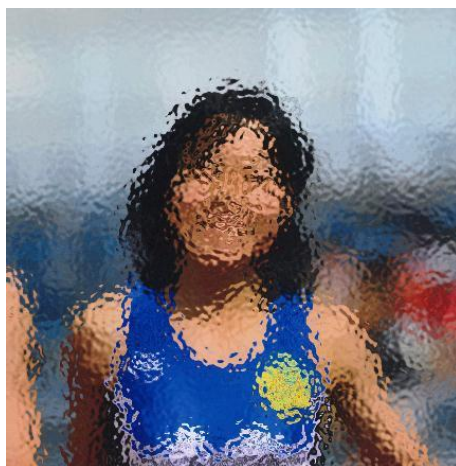
<決勝> 西尾 香穂 7秒83 3位

800m (タイムレース) 前田 梨乃 2分20秒67 8位

## 西尾、個人種目で初のメダル獲得！

## 前田も自己ベストで8位入賞!!

昨年度のこの大会にも出場している西尾は2度目の出場。前は2年生ながら7秒95となかなかの走りを見せている。スタートリストの選手の100mの自己ベストを見ると、西尾の100mのベストタイム12秒11は全体で2番目の記録。ランキングトップはもちろん、夏の全中100mチャンピオンの芝谷中の川崎咲良選手の12秒05である。今では日本でただひとつとなってしまった室内陸上大会。高い参加標準記録が設定されていて、全国各地から有力選手がこの大阪城ホールに集うこと



になる。「表彰台が目標だぞ！」と、声をかけると「緊張するから、あまり期待しないでください」と、相変わらずのマイペース。同じ60mに出場する山本祐莉は西尾の去年のタイムが参考の目安となり、決勝進出を何とか果たしたいという思惑であった。

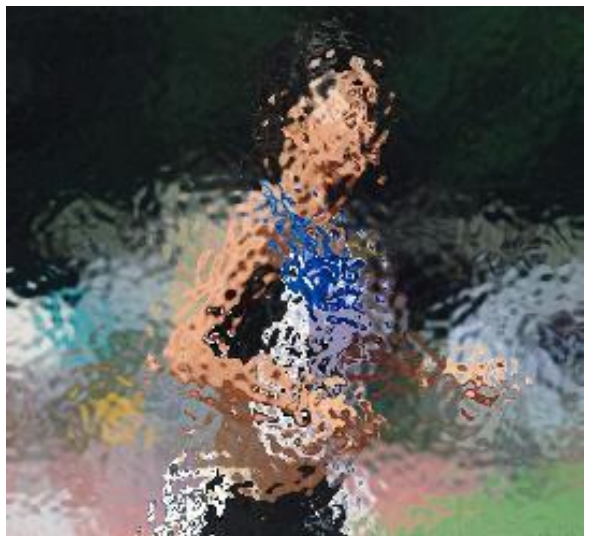
大会初日。この日の出番はないが、ボードトラックの感覚を覚えるために朝の8時前に到着。あわただしく受付を済ませて、早速アリーナに降りて調整練習をおこなった。この日は茨木市民駅伝の開催日で、2人だけのはじめてのお使い状態になる。時間や乗り換え方法を書いた紙を2人に渡して細かく説明したものの、不安で仕方なかった。何しろ、横浜の日産スタジアムのスタンドからサブトラック競技場に行くときも平然と道を間違えた西尾である。「先生、心配ないですよ」と、あっけらかんと答える西尾のそぶりを見て、よけいに不安になった。いっしょに行く祐莉も「大丈夫です！」と、これまた自信ありげに言うのでますます不安になった!? 2人で話しこんでいるうちに環状線をぐるぐるまわっているんじゃないかと、疑心暗鬼になったものです。携帯が9時30分頃に鳴って、「(調整練習が)今終わりました」と、西尾の顔。どうやら、第一関門をクリアしたみたいでひ

とまず胸をなでおろした。

大会2日目。この日は800m出場する前田も合流する。この日も8時前には大阪城ホールに着いて、予定どおり調整練習をこなした。ボードトラック初体験の前田は多少の戸惑いを見せた。1周160mのトラック。カーブがきつく、外側にいくほど傾斜が強くなっている。ジョッグを繰り返した後に、この傾斜のある曲走路の部分で速いウィンドスプリントを何本か入れさせた。

9時30分。ウォーミングアップを済ませた前田を選手招集所へつれて行く途中に、もう一度アリーナを見せた。「400mのトラックと違って、前の走者を追い抜くには労力がある。前半からいい位置をキープすることが大切だ。追い抜くときはカーブの出口付近で並んで、直線部分で追い抜くのが理想であることも頭の片隅に入れておくこと」と、最後にアドバイスした。選手招集所の前にはスポンサーの給水ブースがあり、入り口では補助役員が選手の荷物やTシャツの商標に白いテープを貼り、携帯電話の持ち込みも禁じられるなど、全国大会独特の風景がそこにあった。

10時00分競技開始。中学女子800m全部で5組のタイムレースがおこなわれ、その1組に前田が登場した。内側から4人の選手が並び、前田はそのうちの2番目、隣の選手も前田と同じセパレートユニフォームを着用していた。普段と違って、最初からオープンコースとなる。ピストルが鳴って勢いよく前田が飛び出した。カーブをまわって先頭のすぐ後ろの2番手が前田となった。あっという間に1周が終わる。客席からは応援に駆けつけた東雲女子1年生も加わって、「ファイト！」の大応援。400mの通過が67秒、4周目に入って3番手の選手がトップに躍り出るが、前田も先頭を引っ張っていた選手を抜いて2番手をキープする。ラスト1周の鐘が鳴って先頭の選手がスパート。そのままゴールすると速報のデジタルタイマーの数字が『2：18：51』と表示された。この数字を見て2番目にゴールした前田がほぼ自己ベストで走っていることがわかった。ライブリザルツが出て、前田の正式記録は2分20秒67と発表された。わずか100分の3秒であるが、自己ベスト。前日の茨木市民駅伝で3kmを走っている上に、まったく中距離的なスピード練習もしていないのだ。この走りにくいトラックでこの結果はよく健闘したと言える。5組のレースが終わって、電光掲示板に前田が8位入賞であることが表示され、アナウンサーも「第8位。前田梨乃さん。大阪、東雲中学校。記録2分20秒67」と紹介した。東雲ベンチから祝福の拍手と歓声が巻き起こった。



14時20分。中学女子60m予選開始。全部で7組あり、タイム上位8名が決勝進出となる。当たり前であるが、室内なので風に左右されることはない。各組で1着になることよりも、自分のレーンに集中して自分の走りを徹底したい。7秒8台が決勝進出の目安となる。2組の三重の選手が7秒72で走って1着。強さを感じた。続く3組。4レーン



に西尾が登場。西尾はもともと後半型の選手で、スタートダッシュをあまり得意としない選手である。「(スタートの)反応時間を気にするよりも、効率の良い加速をすることを心がけるように」と、アドバイスしている。会場が静まり返る中、スターターのピストルが鳴った。西尾は3歩目でややバランスを崩して、スタートダッシュで出遅れた。でも、ここから西尾の真骨頂で伸びやかなストライドでぐんぐん前に出る。圧倒的な強さで1着でフィニッシュ。速報のデジタルタイマーには『4：7：86（4レーン、7秒86）』と表示された。

最終7組。6レーンに山本祐莉。隣の7レーンは千葉全中の4×100mリレーで優勝したちはら台南のアンカー、松本理夏子選手である。祐莉は西尾と逆でスタートダッシュを得意とする前半型の選手。ツボにはまった時のスタートダッシュは西尾にも負けない力を持っている。「前に出る選手がいても、決してリキまないこと。自分のレーンに集中すること」と直前に伝えている。スターターのピストルが鳴って仰天した。隣の松本選手が5～6歩目で明らかに差をつけて前に出ているのだ。あとの選手は横一列。独走で松本選手がフィニッシュ。7秒66の記録は室内中学記録に100分の5秒差に迫る大記録である。祐莉は5着8秒12。松本の速さにびっくりした上に横一線となってリキんでしまったようだ。結局、西尾は全体で4番目のタイムで決勝進出を決め、祐莉は予選敗退となった。



夏は千葉で全国中学校陸上選手権。秋は横浜でジュニアオリンピック。そして、冬は大阪で日本ジュニア室内陸上。舞台が移ってもいつものように顔を合わせるトップ選手たち、そして指導者の面々。リレー日本一を激しく争いあったちはら台南と東雲。この両チームからそれぞれ2名の選手がこの60mに出場し、それぞれのアンカーが決勝に残って対決する。個人種目の100mでは全中では西尾が準決勝敗退、ジュニアオリンピックでは松本選手が準決勝敗退。この大阪で決勝レースとしては初めての直接対決となる。さらには夏の全中リレー2位の新潟小針の矢尾優奈選手も決勝に残っている。夏、秋

にしのぎを削った日本中学のトップアスリートが再会して親交を暖めあい、互いの成長ぶりを讃えあい、そしてガチンコ勝負するのだ。そういう見方をすれば、とても味わい深い大阪冬の陣の戦いとなる。

17時05分。中学女子60m決勝。4レーンに西尾、6レーンに松本選手、そして全中チャンピオンの川崎選手が8レーン。選手招集所に向かう途中に、「この決勝レースを何度も経験することで、本当の勝負強さが身につくもの。結果を怖れず、自分の力を出し切ることに集中すること」と、言い渡していた。西尾のフロートを見て、その言葉どおり集中している様子が見てとれて安心した。鍵を握るのはスタートダッシュ。1歩目で速く地面をとらえることはできているが、2歩目がやや大きすぎて3歩目でバランスを崩す傾向があるので、そのあたりの修正もウォームアップ場で確認済みである。「オンユアマーク」のスターターの声にホールが静まり返る。運命のピストルが鳴った。やはり、6レーンの松本選手が前に出る。8人の選手があっという間にフィニッシュラインを駆け抜けて、前方にあるセーフティマットの壁にぶつかり跳ね返って来た。西尾の3着が目視で確認できた。思わずガッツポーズ。1位松本選手、7秒63。室内日本中学記録までわずか100分の2秒足りない立派な記録である。3位に西尾、7秒83、5位に川崎選手で7秒91。西尾が初めて川崎選手に勝ったレースとなる。ジュニアオリンピックの決勝では準決勝を4番通過で5位、今回は同じ4番通過で3位。一步一步着実に成長していることがとても嬉しかった。

07年大阪世界陸上でも使われた音楽が流れて、表彰セレモニーが始まった。表彰セレモニーのある大会は大阪大会（通信・中学選手権・総体）、大阪陸上カーニバル、日本選手権サブイベント、近畿大会、全国大会（全中・JO・室内）。これらすべての大会で西尾は表彰台に登ったことになる。さらに特筆すべきは2012年度のトラックレースに西尾が出場した日数は47日にもものぼる。毎週のように試合に出ていた印象があるくらいで、しかも100レース以上走って、ケガや体調不良で欠場したことは一度もないのだ。表彰セレモニーではいつもの笑顔。「東雲の西尾さんはいつ見ても、楽しそうに笑っている」と多くの先生が口をそろえておっしゃってくださる。陸上競技が楽しくて仕方ないことでしょう。おそらく陸上の神様は、これから彼女にも試練や困難を与えるはずだ。それでも彼女は笑顔で陸上競技に打ちこむに違いない。高校では川崎選手とリレーを組み、高校日本一、そして日本高校新記録の樹立が具体的な目標になる。将来は日の丸をつけて世界大会で活躍する選手になるのではないか。そんな将来性豊かな選手と出会えたことに感動している。

